

# 第一次大極殿院南門軒先木口金具の復元

## —第一次大極殿院の復原研究24—

**はじめに** 昨年来、平城宮第一次大極殿院南門（以下、南門とする）の軒先木口金具の意匠検討を進めている。これまでは藤原・平城京域の寺院から出土した遺物について、単位文様と呼ばれる最小単位の文様から意匠文様を分析し、金具の大きさ・形状から想定できる各取付部位の意匠的特徴を検討してきた<sup>1)</sup>。本稿では同一建物中の複数部位に金具を用いる事例を中心に、各部位間の意匠的關係から、意匠の構成手法を分析し、その手法を用いて、南門軒先木口金具の意匠を復元する<sup>2)</sup>。

**分析対象** 同一建物で複数部位の軒先木口金具の意匠がわかる古代建築は、出土遺物がある薬師寺西塔（図1：A）、金具や風蝕痕を残す現存建築である法隆寺金堂（図2：B）、同五重塔（図3：C）、平等院鳳凰堂中堂（図4：D）、中尊寺金色堂（図5：E）の計5例である。また、『紀要2017』で掲げた単体の出土例も、形状から所用部位が判明し、意匠の傾向をみる上で参考となろう（図6）。

**基本文様と意匠の構成** 5例の各部位間には、共通する意匠文様や、基本となる文様（以下、基本文様とする）を見いだせる。各部位は、この基本文様に対し、下記5つの手法を用いて意匠を構成している<sup>3)</sup>。

「同様」：基本文様と同じ意匠。

「展開」：基本文様を金具の中心に据え、基本文様の上下や四隅に唐草などを展開し、金具の形状に対応させる。

「増殖」：金具の大きさにあわせて、基本文様を大きくし、大きくなった隙間に単位文様を配置。意匠性が増す。

「変形」：基本文様の形状自体を変化させる。

「行列」：基本文様を正位置で、縦横に並べる。

垂木は「同様」もしくは「展開」を用いる（A、C～E）。尾垂木など長方形木口の部位では「展開」が多い（C～E）。とくに尾垂木は平隅ともに、同じ文様構成が多く、線対称の唐草文はみられない（B～D）。一方、隅木は基本文様を線対称の唐草文に「変形」するDがあり、隅木の意匠的特徴と考えられる。「行列」の文様構成はBのみで、基本文様の龍文自体が古い時代の要素である。各部位の文様構成を整理すると次のようになる（図7）。

垂木：主弁に間弁を配置・「展開」した正面形の花文。

隅木：正面形の花文の上下に唐草を「展開」。

唐草文を線対称で配置。

基本文様を「行列」で配置。

尾垂木：正面形の花文の上下に唐草を「展開」。

**南門復元意匠の根拠** 南門の復元意匠は（図8）、官営という建築的性格と南門に近い建立年代を理由に、大官大寺金堂（図6：a）を根拠とする。加えて、単位文様の形状は、年代様式の観点から阿弥陀浄土院（図6：d）<sup>4)</sup>やAなども参考とする。文様構成は先の検討成果を復元の基本方針とするが、Bのみの「行列」は不採用とした。

**垂木** aの意匠文様を構成するC字形と対葉形を抽出し、点対称に配置すると、四弁の正面形の花文ができる。中心部には4つのC字形を背中あわせに配すると、四隅が突出した正方形が形成される。ここに本薬師寺（図6：b、c）、A、興福寺中金堂（図6：e、f）にみられる円形を配置すると、より中心性が増す。これを基本文様とし、四弁の間には隅の形状にあわせ間弁を配置する。

**隅木** Dにみえるように、線対称の文様配置は隅木の意匠的特徴と考えられ、aの文様構成を南門の復元意匠とした<sup>5)</sup>。ただし、内側を向く対葉形は、同年代の類例では確認できず、意匠年代をより8世紀前半に近づけるため、宝珠形に変更した。

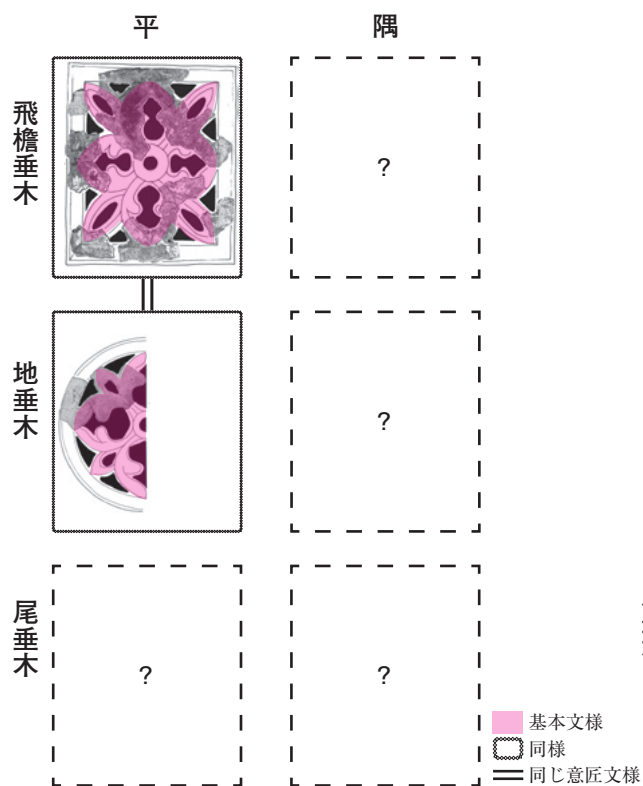
**尾垂木** 中心に据える基本文様は、金具の形状にあわせ縦長とする。その際、文様は大きくなり、対葉形内部の空間も大きくなる。dを参考に、「増殖」を用い、対葉形の内側に宝珠形を配する。基本文様の上下に展開する唐草は、aの流れに従い、外側にある流れの始点を90°回転、基本文様側に配置する。

**おわりに** 課題は今回復元した南門の軒先木口金具の意匠が古代の技術で製作できるかである。まずは古代の製作技術がどのようなものか別稿で検討したい。

（大橋正浩／佐賀県教育庁）

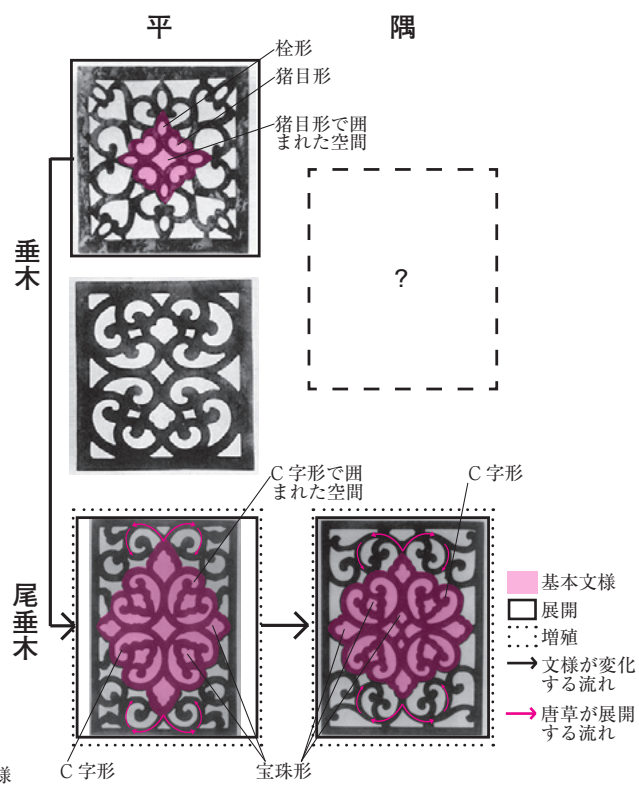
### 註

- 1) 『紀要 2017』 3-5 頁。単位文様には宝珠形、対葉形、C字形がある。これらを金具の中心に配す構成を正面形の花文と称している。
- 2) 復元検討は2017年8月時点における成果。
- 3) 5つの手法の名称については筆者による造語である。
- 4) 前掲註1。
- 5) aは出土位置と金具の大きさから、尾垂木か隅木所用としている。『年報 1975』記載の復原寸法、幅330mm×成420mmを部材寸法と仮定した場合、幅：成 = 1：1.3となる。この比率は現存するB、D、鶴林寺常行堂、Eなどの地隅木と同じ比率である。したがって、部材寸法からは、aが隅木所用である可能性が高い。



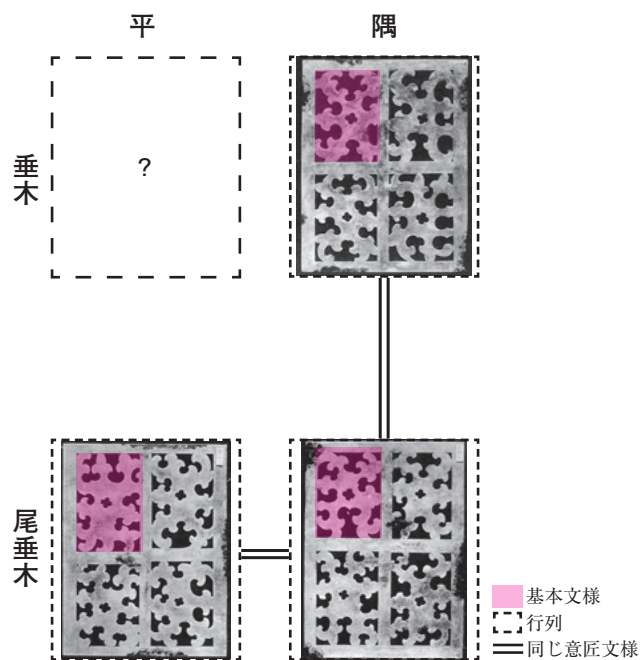
(奈文研『薬師寺報告』図版 PL.120、1979)

図1 A. 薬師寺西塔



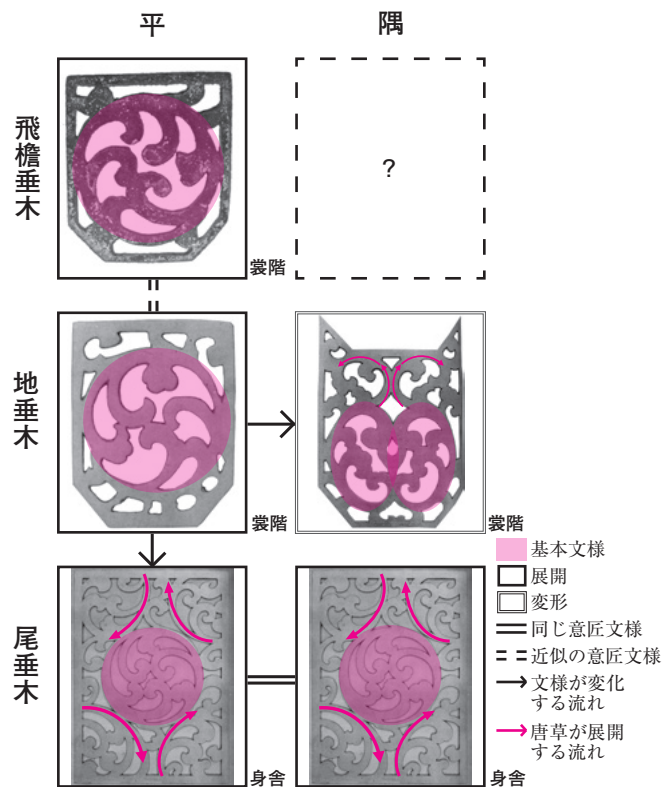
(法隆寺國寶保存委員會編  
『國寶 法隆寺五重塔修理工事報告 附圖』235-239 頁、1955)

図3 C. 法隆寺五重塔



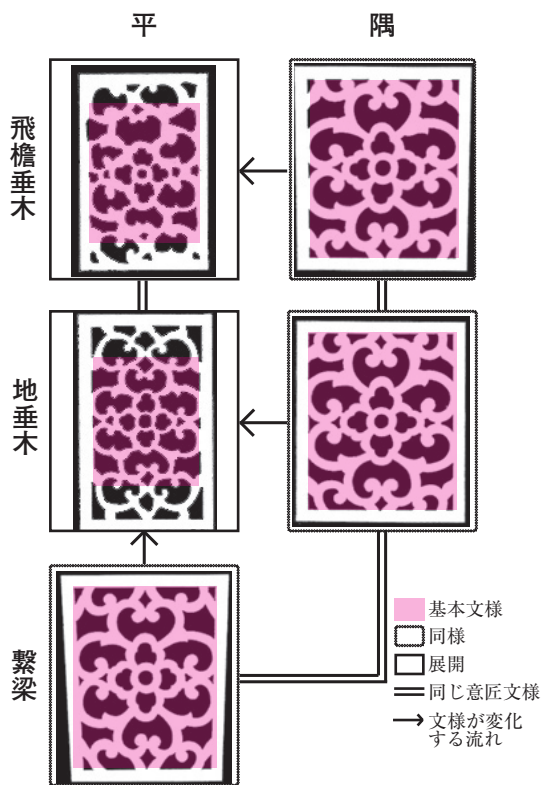
(法隆寺國寶保存委員會編  
『國寶 法隆寺金堂修理工事報告 附圖』296-297 頁、1956)

図2 B. 法隆寺金堂



(京都府教育廳文化財課編  
『國寶 平等院鳳凰堂修理工事報告書 附圖 (二)』141-144 頁、1957)

図4 D. 平等院鳳凰堂中堂



(国宝中尊寺金色堂保存修理委員会  
『国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書』150頁、1968)

図5 E. 中尊寺金色堂

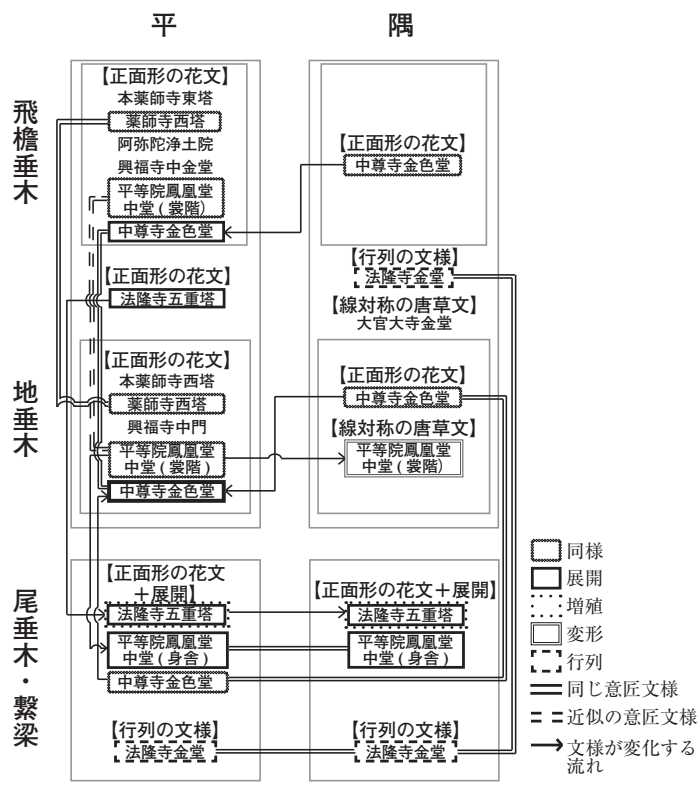


図7 部位ごとの文様構成

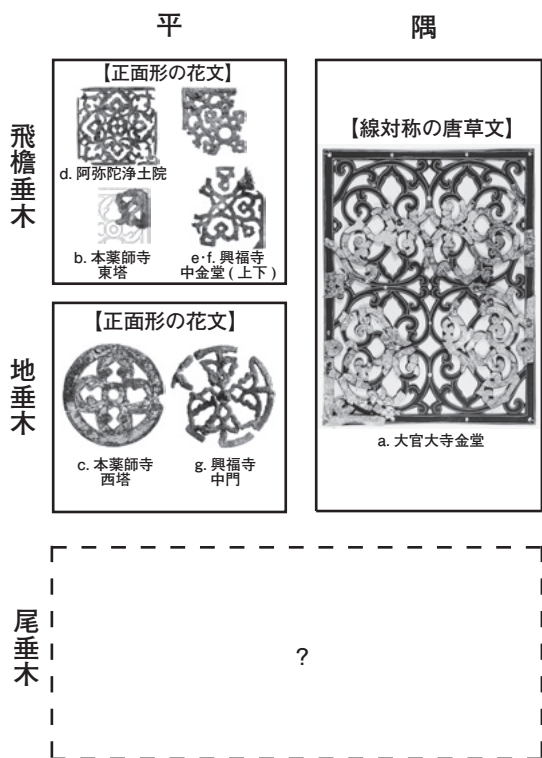


図6 単体で出土した軒先木口金具の意匠  
と所用部位との関係

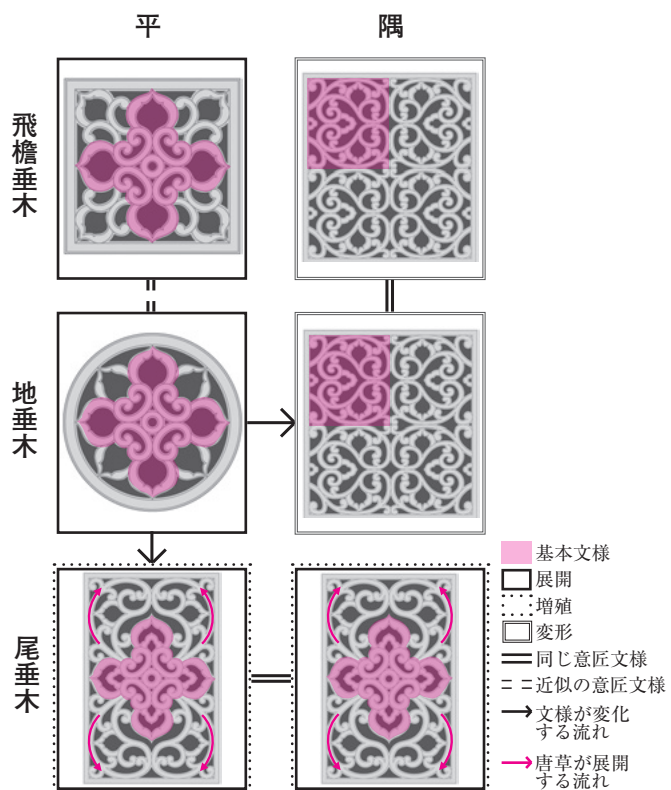


図8 平城宮第一次大極殿院南門